



上電友の会だより

(空っ風通信)

第3号



Joden Supporters Club

赤城山麓を走る電車

上電が設立されたのは大正 15 年(1926 年)の5月 27 日。

84周年を迎えた 2010 年の設立記念日に、地域の足である上毛電鉄の末永い運行を目指して「上毛電鉄友の会」は発足いたしました。

今年は友の会発足 2 年目。これからもみんなでサポートして上電を盛り上げよう!

挨拶 新年のご挨拶

2012 年の新年を迎え、上毛電鉄友の会(以下本会)会報第 3 号が発刊されるに際して、会員の皆様や、平素から地域の足として安全運転に一丸となって取り組んでおられる上毛電気鉄道(以下上電)の社員の皆様、沿線の自治体や市民の皆様へ感謝申し上げます。昨年は、東日本大震災に遭遇して、日本全体が大変厳しい年になり、まだ各地でその爪あとも残ります。東北地方の鉄道を見ると、新幹線が青森まで延伸して沸き立った反面、ローカル鉄道は、まだ数ヶ所で寸断され、復旧の見通しが立たない区間もあります。また、十和田観光電鉄が休廃止を決めるなど、益々厳しい状況あり、鉄道の復旧と今後の利用促進を祈念しております。

1 月 3 日、新春恒例の上電イベントが実施され、本会は、昨年好評だった新春トークショーを、東武博物館の花上理事、上電の古澤社長、大島と佐羽・岡田・新保各副代表で実施し、赤城山観光や沿線の電車・バスの賑わいの変遷を語り合いました。その席には、ご来場の多くの方々が参集し、その様子は交通新聞や前橋市広報などでも紹介されて、社会的注目も集めました。

本会創立 2 年目にあたる昨年は、一昨年を踏襲したスタンプラリーや上電のイベントに際した企画のほか、11 月 26 日、足尾方面へのハイキングを主催しました。幸い天候に恵まれ、上電の協力もいただき、40 名近くが参加して盛大かつ有意義な1日になりました。

今年も、昨年同様の活動を予定しますが、好評だったハイキングを 2 回実施したいと思います。その具体案として、1 回目を初夏に桐生市内で、そして 2 回目を晩夏から秋頃に廃線鉄道の散策等を計画しています。また、直近の節目にあたる上電創立 90 周年に向けた社史(仮題:上毛電鉄 90 年史)の編纂を始動したく、その下地として、今後企画・編集会議を定期的に行い(2 ヶ月に 1 回程度)、案を練っていきたいと思います。また、多くの方からの情報と資料提供も募りたいので、ご協力をお願いいたします。(代表 大島登志彦)

問 クイズ大会奮戦記 (9 月)

群馬デスティネーション・キャンペーン中の昨年9月4日に、大胡車庫で開催された上電イベントで、友の会主催のクイズ大会を行いました。一昨年も実施していますので、恒例イベントとなりつつあります。

クイズの作成、出題は、友の会の会員が担当。イベントに来ていた親子連れなど数十名が参加しました。回答するときは○×の2つに分かれてもらい、数回正解して残った方にプレゼントを進呈しました。景品は何種類かあったので、クイズがすべて終わった後に、違うものと交換してとせがむ子もチラホラ。将来のオバタリアンか。(古!) 紙面を借りて一問出題しますね。

路線バスの全盛時代の昭和 40 年代に大胡駅に乗り入れる路線バスを運行していたバス会社は、自社の上毛電鉄と東武鉄道のほか、群馬中央バスである。

答え×

群馬バスが正解、渋川-大胡線を運行していた。(新保正夫)

絵 新キャラ 大胡といちくん紹介

上毛といち君

前回の友の会通信で紹介させていただきましたが、このたび公募により名前が決まりました。上毛電鉄の「上毛」とデハ 101 の数字から「といち」

上毛といちとなりました。赤城いずみちゃんと上毛といち君で上毛電鉄を盛り上げていければと思います。

2011 年のスタンプラリーではいずみちゃんと、といち君にはスタンプの絵柄になってもらいました。

上毛といち君のプロフィール

デハ 101 系の精霊的な感じの男の子。昭和 3 年生まれの子で外見は年老いても中身は子供なんです。中身が純粋な分、子供たちとも仲良くやっています。またいたずら大好きなのでお仕事のいずみちゃんにも邪魔していたりします。

(平岡隆一)



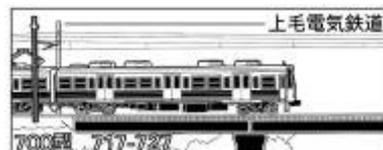
(デザイン: 神楽坂たま氏)



印 平成 23 年度スタンプラリー結果

2011年10月14日から12月15日に実施しました、友の会企画スタンプラリー結果をご報告します。

- ・参加者プレゼント(5個スタンプ)の応募 …35名
- ・スタンプラリー鉄道クイズ (10個スタンプ)の応募 …21名
うち全問正解者 9名
- ・10個スタンプを集め、
1/3新春イベントコンプリート賞で交換された方 … 22名



今回のスタンプラリー企画でも、皆様のご参加ご応募をお待ちしております!!



上電友の会のイベントとして、2011年8月20日にビール電車として貸し切ったデハ101に乗車しました。

レトロなチョコレート色をした外観に比べて、実際に乗車してみると明るい雰囲気の内装が意外でした。

そして、もっと意外だったのは、予想を遙かに上回る力強い走りだったことです。正直、もっとチンタラとした走るのでは…と思っていただけに、まさにサプライズな走りでした。

一番感動したことは、車両が停止している時から、動き出したときのあの瞬間…ワクワクするものですね。子どもの頃、親といっしょに電車で出かけた時、車両が動き出した瞬間っていつも、すごくワクワクしたことを何十年かぶりに思い出してしまいました。懐かしい感動…子どもの頃の思い出がよみがえります。

また、私は北原駅が最寄りで、北原駅から中央前橋駅までは度々乗車しているのですが、西桐生方面の車窓は初体験。勿論西桐生駅に降り立ったことも初めてでしたし、東武線のりょうもう号と競争する場面も初めて体験できました。



この日は、ビールと共に沢山のワクワクの瞬間を楽しむことが出来ました。また乗車出来る日を楽しみにしております。

(関智)



11月26日に行われた

上電友の会主催の「わたらせ渓谷鐵道沿線ハイキング」に参加しました。わ鐵神戸駅周辺と間藤駅からあかがね親水公園までの2つのコースをわ鐵に乗って楽しみました。



上電赤城駅に集合後、わ鐵大間々駅に向かいます。大間々駅から神戸駅まで晩秋の渡良瀬川の景色を楽しみながら過ごします。神戸駅から旧足尾線の線路跡を歩きます。SLの煙で黒くなってる琴平トンネル、ちょっと強度が心配のロックシェード、謎のモアイ像を通りながら落ち葉を踏みしめ草木ダムを見上げるポイントで折り返し、神戸駅から通洞駅へ。一旦解散し昼食です。駅前のコロケも食しました。間藤駅までわ鐵で移動し、あかがね親水公園まで往復の歩けです。かつては日本一の銅の産出量を誇った



足尾を象徴する精錬所。今はその面影もありませんがその歴史は、「鉱山近代化」の光と、「鉱毒問題」の陰に彩られています。そんな思いを馳せながらのハイキングでした。(山田修)

※次回のハイキングは、6月2日(土)桐生市内を予定します。詳細が決定次第、ご案内します。(事務局)

〈編集後記〉

上電友の会便りの3号も、無事発行することができました。(私は特に記事を書いたわけではありませんが…)まだまだ発展途上ではありますが、上電友の会としてイベントも行えるようになってきました。

大島会長の挨拶にもあったように、今後友の会として様々なイベントを計画しております。上電活性化と合わせ、今後とも上電友の会をどうぞよろしく願います。

(児玉洋)

2012年1月3日に開催された上毛電気鉄道の「お正月イベント」では、新春トークショーが開催されました。その様子についてご報告します。

午前中は、「上毛電鉄の観光資源」をテーマとして行われました。

上毛電鉄友の会の大島代表がコーディネーターをつとめ、東武博物館の花上理事、上毛電気鉄道㈱の古澤社長、佐羽副代表がパネリストとして参加しました。

トークショーの中では、昔は赤城観光のため、浅草駅から赤城駅までたくさんの方が来ていたエピソードが紹介されました。(通常の座席では足りないため、通路に長椅子を置いて対応していたの事です！)

また、上電沿線には、城跡なども多く点在しており、有効な観光資源になり得るとの話がありました。普段何気なく接しているものも、外から来た人にとっては、新鮮なものもあり、身近にある観光資源を発見して、それをPRしていくことが大事だという話もありました。

上電は多くの方が通勤・通学で利用しているとのことですが、今後は、今ある観光資源もPRしながら、新たな沿線の観光資源を発見し、観光利用としても乗車してもらえるようになって良いと感じます。

利用者の方などから沿線の身近な観光資源を紹介していただくような仕組みがあって良いかもしれません。(近藤宏紀)

また、午後の部では「上毛電鉄の再生」といって、少々重めのテーマについて意見が交わされました。

「利用者の減少は運行頻度の見直しなど合理化にも影響する」という古澤社長の発言に対して、大島代表は、路線バスが減便による客離れを招いた過去の教訓から「パターンダイヤが崩れると急激な利用減に結びつく」と指摘がありました。そのほか、新保副代表からは、「マイカーに対抗するためには、他の交通機関と手を取り合わなければ太刀打ちできない」として、1月6日に開業する前橋市のコミュニティバス「マイバス東循環」と上電との連絡を例に紹介がありました。また、東武博物館の花上理事は「起終点の前橋と桐生の中心街が活性化しないと、上電も活性化しないと、沿線のまちと鉄道とは運命共同体であるという考え方を示しました。

このように、経営の合理化(列車本数削減により直接的に経費を削減するなど)だけではなく、会社と地域が一体となって上電を盛り上げ、利用者を増やしていく取り組みを続ける必要性を改めて認識し、閉会となりました。(太田聡彦)



発刊 上毛電気鉄道 友の会

WEB <http://www15.wind.ne.jp/~joden/supporters/>

E-mail joden-support@kl.wind.ne.jp